



北朝鮮の黒幕

金融アナリスト
永山卓矢

【中国の置かれた立場】

北朝鮮の「暴走」が止まらない。今年に入ってからだけでも、1月1日の「新年の辞」で金正恩労働委員長が「大陸間弾道ミサイル(ICBM)の試験発射の最終段階にある」と述べて米国を挑発。2月12日には、安倍首相が訪米してトランプ米大統領とゴルフをしている最中にミサイルを発射。さらに翌13日には、マレーシアのクアラルンプール国際空港で金委員長の異母兄の金正男氏が殺害されている。そして3月6日、再び日本海に向けてミサイル4発が発射された。

巷間では、米国が北朝鮮を攻撃するとの観測が熾っている。6日にミサイル4発を発射したのは、北朝鮮側が明確に在日米軍への攻撃の訓練であると宣言している。

米国に届くICBMの開発や実用化の時期も近いとされている。さらに金正男氏が殺された際には猛毒ガス「VX」が使用されたが、これをミサイルに搭載すれば無差別的なテロ活動に活用できる。それにより、金委員長は米国の「虎の尾を踏んだ」といった事が言われている。

米国の批判の矛先は中国にも向けられている。トランプ大統領が「中国が望めば簡単に出来る」と述べるなど、北朝鮮が暴走しているのは中国がしっかり同国に圧力をかけていないからだとして非難している。これに対し、王毅外相は2月17日に「直接の当事国である米国と北朝鮮が速やかに政治決断をすべき」だとして、中国による関与には限界がある事を暗にほのめかした。

北朝鮮は原油その他のエネルギーの供給を中国経由に依存しているため、確かにその停止をほのめかす事で中国は大きな影響力を行使できなくはないはずだ。

しかし、北朝鮮の現体制が崩壊して韓国主導で朝鮮半島が統一されると、中国としては隣国に核兵器を持つ親米国が誕生する事になる。しかも、中朝国境に米軍が駐留する事になり、安全保障上の観点からも中国としてはこうした状況は容認できない。

さらには、それにより大量の難民が国境を越えて中国領内に押し寄せると、首都北京にまでそれほど距離がないだけに、沿海部の大都市の治安が乱れて共産党による統治体制すらも危機的な状況に陥りかねない。

【軍を操る勢力】

このように、中国としては絶対に北朝鮮の現体制を崩壊させられない事情があり、そうした「弱み」につけ込んで北朝鮮が「瀬戸際外交」を展開している。

ただ、ここで考えなければならぬのは、北朝鮮では金正日総書記の時代から「先軍政治」により軍が主導権を握っているが、その軍の背後にどのような勢力がいるのかという事だ。

そもそも、北朝鮮は相次いでミサイル発射や核実験を繰り返しているが、国民の多くが飢えている国で、果たして誰がその資金を提供しているのか？

また北朝鮮は「見違えるほど」に日増しにそうした技術を向上させているが、誰がその技術を教授しているのか？

さらにいえば、こうした誰もが疑問に思っておかしくない事を、どうして多くの報道機関が採り上げないのか？

あえてはっきり述べると、北朝鮮にそうした技術を教えているのは、ラムズフェルド元米国国防長官が深く関与しているスイスの巨大軍需企業A B社である。

この会社は、第二次世界大戦以前に米巨大財閥がドイツに設立し、ナチス政権の独裁化や同国の軍備増強を後押しして、特に大量殺戮兵器としての毒ガスを量産して供給していた化学兵器産業の系譜を引いている企業として知られている。

ちなみに、米化学大手企業のモンサントも、これと同じ系列。その子会社の製薬企業ギリアド・サイエンシズ社でもラムズフェルド元長官が深く関与しており、「表の顔」ではインフルエンザ特効薬を製造しながら、「裏側」では遺伝子操作を駆使して新型ウイルスを生み出していた。

すなわち、米国の「死の商人」たちは、化学兵器についてはスイスの軍需企業を、生物兵器については米化学企業の子会社を利用して開発や実用化に取り組んできたわけだ。

北朝鮮の軍部を操っているのは、親イスラエル右派や米共和党系新保守主義(ネオコン)派であり、米石油大資本につらなる米軍需産業がその背後にいる。

かつて、北朝鮮で最初に核開発疑惑が高まったのは93年の事であり、米クリントン政権との「出来レース」による交渉の結果、翌94年10月に米朝枠組み合意が締結されている。

その際にカーター元大統領と会談するなど米国との対話に際し、韓国との統一を模索していた金日成国家主席が急死している。

その死因については「謎」が多く、本当は子息の金正日総書記を取り囲んでいた米ネオコン派につらなる軍部に暗殺されたといわれている。

その金正日総書記も11年12月に死去したが、その死因についてもかなり謎が多い。

地方を視察するために乗り込んでいた列車の中で死去したとされているが、米国の人工衛星が映した画像からは、その列車は発車していなかったという。おそらく、それまでは米ネオコン派が金総書記を操っていたのが、御しきれなくなると殺害したのだろう。金総書記は肥満症で糖尿病を患っていたとされるが、その太り方がいかにも不自然だったのも気になる所だ。

その後を継いだ現在の金正恩委員長は最高権力者になって以来、多くの幹部を粛清して処刑しているが、果たして本当に委員長自身がそうしたことを繰り返しているのか、疑問視する必要がある。金委員長も父の金正日総書記と同様に異様な太り方をしており、ストレスによる過食症によるものとされているが、疑ってかかる必要がある。

実際、金委員長の「耳たぶ」の形が最高権力者に就任した当初と現在とでは変わっているとの指摘があり、現在では「替え玉」に置き換わっている疑念が拭えない。

【北朝鮮問題の背後にある意図】

いずれにせよ、中東のイスラム勢力とともに極東では中国を敵視してその脅威を煽り、軍拡競争を繰り返そうとしている米ネオコン派が北朝鮮では軍部を操って主導権を握っているのだから、中国が嫌がる政策を繰り返して当然である。

実際、北朝鮮の動きに恐れを抱いて韓国では地上配備型ミサイル迎撃システム(THAAD)の配備に動いている。日本も2月10日の日米首脳会談でその配備を求められたようだ。

北朝鮮のミサイル発射に対してトランプ大統領が「日本は不公平な立場に置かれている」と述べたように、大きな潮流では「公平な立場」になるべく、日本は憲法を改正して核保有に向かうといえよう。

米権力者層は大きな潮流では中国を相手に「新冷戦」構造の構築に向かっているが、当面は中東の「イスラム国(IS)」やシリア派大国イランへの攻撃を優先するにあたり、ひとまずトランプ政権に「一つの中国」の原則を受け入れて中国と和解させた。

いかに米国は世界覇権国であるとはいえ、中東と極東の二正面で軍事的に対処できるだけの国力がないからだ。とはいえ、共和党系ネオコン派主導のトランプ政権はひとまず直接的に軍事的に対峙する事は避けながらも、トランプ大統領の保護主義的な姿勢を利用する事で、異なる手段で中国を追い詰めている。

2月23日にトランプ大統領は「為替操作のグランド・チャンピオン」と述べて中国を激しく非難した。同日にムニョーシ財務長官は4月に為替報告書が公表される以前に決定する事はないと発言したが、それは裏返せば、公表され為替操作国に認定されれば極めて高率の関税を課すと宣言したといつて過言ではない。

それはつまり、期限までに北朝鮮に対して何らかの抜本的な措置を打ち出さないと、それに認定すると脅したことに他ならない。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ガテクニカル

イベント目白押しの週

日経平均株価は昨年12月から2万円の大台に阻まれ、上値19,600台から下値18,600円と僅か1,000円幅動きで燻っている。その間、NYダウ平均は1,000ドルの上昇を演じた。

史上最高値を更新中ゆえ、高所恐怖症的な面もあり、なかなか追いかけて辛い展開でもある。ただ、米国株価は3月1日高値からの下げで、今回のFOMCの利上げを織り込みにかかっている。このケースでは3月15日、実際利上げとなれば、材料出尽くしで再び上昇を開始する流れが想定されるが、相場はその前に底を打つものだ。しかし問題は利上げ回数であろう。

今年3回は昨年12月の利上げ時点で織り込んだものの、4回の利上げはまだ織り込んでいない。

今回の雇用統計、そして来週の15日FOMC後のイエレン議長の記者会見でその判断がゆだねられる。

来週は更に15日、オランダの総選挙、16日、日銀金融政策決定会合、米債務上限枠引き上げ期限と一連のビッグイベントを控えている。どこかでショック安が入ってもおかしくない状況。米国株式市場では「株価は恐怖の壁を攀じ登る」といった

格言がある。常に懸念は付きまとうが、相場が反応するか否かは時の運。何時起こるか分からないものを想定しては相場に参入できない。無論、オプションや先物などで売りヘッジをかけておくのも一つの手。現在の相場から判断すれば、NYダウで2万ドル割れ、日経平均で今年のレンジ下抜け時は警戒しておく。それ以外はトレンドに従い、レンジ上抜けは最低でも今年のレンジ幅1000円を上乗せした21000円を目標とする。



今週の目押し

下値サポート維持

先週発表された2月のADP雇用統計は、前月比18.5万人増の市場予想に対して29.8万人増。1月分も1.5万人上方修正。その後10日に発表された2月雇用統計でも前月比20万人増の市場予想に対して23.5万人増。1月分も1.1万人上方修正。平均自給も前月比で0.2%増加した。しかし、前哨戦のADPの結果が良すぎたのか、市場は織り込み済みの様相。結果的に週末のドル相場は、新規買いよりも売りが優勢となった。

その結果10日のユーロ相場は対ドルで上伸。先週この相場は“昨年12月8日と2月2日の高値を結んだ下降トレンドラインと、1月の直近最安値と2月15日の安値とを結んだ上昇トレンドライン①、更に1月安値と2月22日の安値とを結んだ上昇トレンドライン②とで2つの三角保合いが形成されていた”と指摘していたが、週末引け値でライン①を上抜けた。

当欄では以前からこの相場がライン②で切り返し、15日スローストキャスティクスとの間で「強気オシレーターダイバー

ジェンス」が発生した際に“…この指標が40%を超えて上昇を指向するようなら、よりその可能性が高い。更に現在1.060～1.066に存在している23日、及び69日平均を突破すると相場基調は強気に。直近で最も強力な上値抵抗は、1.08を僅かに超えた付近にある16年3月の安値水準。目先はこの値位置を目指そう。…1月安値を相場が割り込まぬ限り、相場基調は強いと筆者は見る”と記述。現在ライン②を短期サポートにした上昇チャネルラインを設定1.08付近を目先の上値抵抗線としてしばらく上昇基調が続くものと予測する。

奇しくも、ここで予測した上昇チャネルラインの上限は、1月頭の安値（1.0341）から2月頭の高値（1.0827）までの上昇波動を1段目とする2段上げの2段目の目標値（1.0979）とリンクする。1.0827を超えるとあっさり1.1コースかもしれない。

ただ、この1.08エリアは現状強固と考える。昨年12月からの三角保合いは依然継続中。阻まれた場合再度ライン②に戻る。ただ、現状ライン②で相場が維持される限り、昨年5月からの下げトレンドが1月に終わった事が示される分、これはユーロの買い方に有利に働くと見る。エネルギーの放出は近い。

今週の主な予定・経済統計

※米国、カナダは3月12日より夏時間に移行しています

3月13日(月)

・ドラギ ECB 総裁、講演

3月14日(火)

- ・2月の米卸売物価指数、ならびに同コア指数
- ・トランプ米大統領がメルケル独首相と会談
- ・米連邦公開市場委員会（FOMC：15日まで）

3月15日(水)

- ・イエレンFRB議長が会見及び政策金利、経済・金利予測発表
- ・日銀金融政策決定会合（16日まで：終了後総裁が記者会見）
- ・3月のNY連銀製造業景況指数（前回は18.7）
- ・2月の米消費者物価指数、ならびに同コア指数
- ・2月の米小売売上高（前月比0.2%増の予想、前回は0.4%増）
- ・1月の米企業在庫 ・オランダ下院選挙 ・中国全人代、閉幕

3月16日(木)

- ・黒田日銀総裁の会見及び政策金利の発表
- ・2月の米住宅着工件数（125.5万戸の予想、前月は124.6万戸）
- ・米週間新規失業保険申請件数（前週は24.3万件）

3月17日(金)…新月（皆既日食）

- ・2月の米鉱工業生産指数、設備稼働率、景気先行指数
- ・G20財務相・中央銀行総裁会議
- ・3月の米ミシガン大学消費者信頼感指数（前回は96.3）



今週の相場風林語録

大欲は無欲に似たり（3）

「足るを知る者は富めり」というのも、分相應を心得ればこそ。自分の人間としての器が小さいのに、欲望だけは大きすぎれば得られるものささえ逃してしまう。

今週の九星★波動

南雲 紫蘭

そろそろの時間帯

トランプ大統領の施政方針演説も存外安定したもので安心したマーケットはドル買い・株買いで反応したものの、株式についてはそもそも高所恐怖症、ドル買いも肝心の長期金利の上昇が今一つとあって上値にも限界がありました。

その上、欧州をはじめとするクロス円の下落も相まって、どうにもまだるっこしい相場展開が続いています。

その意味では3月初旬のボラティリティ上昇も、今のところ不発に終わっています。その背後で北朝鮮情勢は「新段階」と言っているものになっています。

朝鮮中央通信は「金正恩朝鮮労働党委員長は、在日米軍基地を攻撃する任務を負った軍部隊による4発のミサイル発射実験を指揮した」と伝えました。つまり、米軍を攻撃する意図をもって日本の排他水域にミサイルを飛ばした事になるわけです。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (386)

中原 駿

しかし、そうした上野の実体験に基づくインターネット革命が招く生産性向上の理論は会議を席捲する事は出来なかった。

議長の常務が「それではインターネット革命を先導している米国はどうなんだ」とNYのトレジャラーに振ると、NY支店の大本は

「確かにインターネットがつながったことが将来の生産性を引き上げることを否定する事はないと思うが、それが現時点で巨大な生産性の引き上げを起こしているという数字が出ていない。萌芽がある事は事実だが、それは現在ではない、ということだろう」。

確かに、現在起きていることの数字が出ていないはずはないのであった。



上値抵抗突破示現

テクニカルアナリスト 葛城 北斗

次に下回るまでは買いで攻める

様々な行事を控えた中、ドル円相場は1月半ばからのレンジ相場の上限を突破しつつある。先週は結果的には週明けこそ、上値抵抗線で阻まれ反落したものの、その調整は浅く113.50でサポートされた。

先週のコメント「3月2日の高値114.58はほぼこの3ポイント上値抵抗に阻まれた形となった。このまま、113.50以下に落とされると、今回で4ポイント上値抵抗となる。それまでに突破すれば強力なトレンド発生シグナルとなる」。

4ポイント目は微妙であったが、下値がサポートされ、3月9日の上伸では完全に上抜けた形となった。シナリオでは過去3週間次通り述べていた「3ポイント上値抵抗を上抜けると1月3日の年初来高値に挑戦する動きを見ると予想する。従って、順張りを好む投資家はこの上値抵抗突破からロングを仕掛けていくのも良いだろう。逆張りの投資家は112円台を買い拾いたい。ストップは111.50割れの引け値に引き上げる」。

定石では追撃買いを入れるところだが、ビッグイベントが続くだけに、慎重にならざるを得ない。しかし、どう転ぶか判らない材料を気にしては相場には参入できない。積極的な投資家はストップを明確にして参入するのが良いだろう。そうでない投資家はロングを一部利食いして様子見するのも良い。

先週のコメント「引け値で抵抗線突破は買いだが、その後、引け値で再び下回れば即刻、損切り。ダマシでなければ、相応

従って、この北朝鮮の行為は「挑発」と取られても仕方ありません。トランプ大統領の好戦的態度から考えれば、第二次朝鮮戦争はもはやカウントダウンというべきかもしれないのです。

九星高下伝の月盤は、既に《七赤金星》。先週「逆転が続いているならば「暴落」。さて、どうなることでしょうか」としました。

そろそろ、大きな動きが出てもおかしくないのですが…。

2月27日	2月28日	3月1日	3月2日	3月3日	3月6日	3月7日	3月8日	3月9日	3月10日
月(一白水星)	火(二黒土星)	水(三碧木星)	木(四緑木星)	金(五黄土星)	月(八白土星)	火(九紫火星)	水(一白水星)	木(二黒土星)	金(三碧木星)
陰盛	じり安	虚勢	後上がる	天底	後端急変	急騰	陰盛	じり安	虚勢
3月13日	3月14日	3月15日	3月16日	3月17日					
月(六白金星)	火(七赤金星)	水(八白土星)	木(九紫火星)	金(一白水星)					
前後相反	存外上昇	後場急変	急騰	陰極					

結局、指標に表れるのは、先になってしまう。

失業率などでも2カ月はかかるが、こうした全体に変化を及ぼすような革命が数字になって表れるのは時間がかかるのであった。ところが、未来や変化に本来ベッドすべきトレーダー集団であるべき銀行の投資家はなぜか「フィギュア(統計上の数字)しか信じない」という変な文化が浸透していた。

確かに統計上の数字に表れれば、それは事実であろう。だが、そうした事実が出た後ではマーケットでは遅すぎるのである。

つまり「噂で売って事実で売る」早耳筋の餌食になってしまふ。にもかかわらず、妙に現実・数字主義の銀行では、事実になったら動くのであった。これでは、致命的に遅れてしまう。

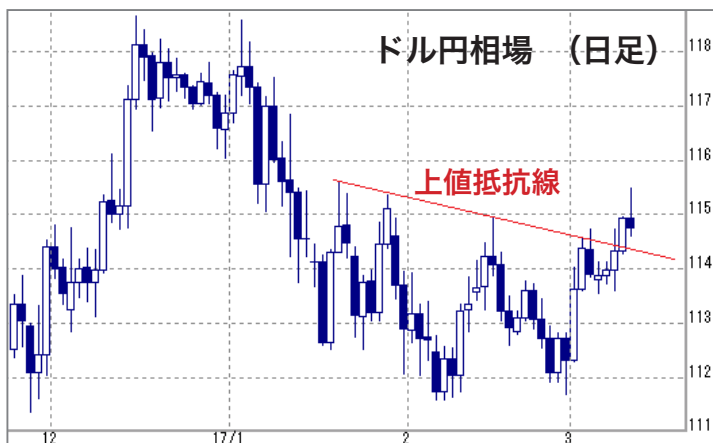
だが、銀行というあるいは機関投資家という立場はいかにも数字が出るまでは現実ではないのであった。

想像力一。それが、機関投資家に圧倒的に欠けている資質であり、決定的なものだった。

の上伸が見込まれ、115円台では一部利食い、残りは116円台から120円台を狙う」。

一部利食いが入ったが、113.50を引け値で切れない限りこのシナリオは有効。また今週、上抜けた抵抗線に引き戻されるようなブルバックが入り、それが113.50以上を維持していれば買いを入れるのも良い。

2月6日からスタートした7～11週のサブサイクルは今週5週目。既に15日の高値114.95を更新した事から、このサイクルの強気型が確定。今後到来するサイクルボトムはイベントによる強力なショック安がない限り、起点(111.58)を下回る確率は低い。従って中長期投資家は111.58を下回らない限り、現行サイクルのボトムを探して買い場を見つける事。それは今後2～6週間以内に到来しよう。目先は中長期投資家も一部利食いを入れておき、押し目で買い直するのが良い。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第31回】ドル／円相場のサイクルについて (2)

メリマン氏は、自著『フォーキャスト2017』の中で米ドル指数の長期サイクルが2017年1月±6カ月以内にトップアウトするという予測を立てています。しかしこれがドル／円相場になると、前回の当欄で示した「100カ月の天井サイクル」で2015年6月5日の125.84円でトップアウトしています。故にこの相場は、少なくともあと80カ月、6年強経過しないと大天井は出現しないでしょう。あるとすれば、ダブルトップです。

この可能性に関する解説は、同じく前回提示したこの相場の「16.5年の底打ちサイクル」を細分化する必要があります。



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

今月末までのチェックポイントと相場動向

2月22～27日の木星・天王星・冥王星T字スクエアに対する火星トランスレーション、3月2日の魚座での太陽・海王星コンジャンクション、3日の木星・天王星オポジション（180度）、そして4日の金星逆行開始。米国株式、NY金、銀、白金、原油相場は軒並み上記の時間帯で高値をつけて下降局面に。ドル／円、ユーロ／ドル相場は逆に安値をつけて上昇局面に入っている。良く判らないのはドル指数と日経平均株価である。

先週、当欄では「金星逆行中間点までのチェックポイント」と題して目先の注目すべき天体位相を幾つかピックアップした。即ち“…12日。ここでは水星・土星スクエア（90度）と満月が出現する。次に18日。ここは水星・金星コンジャンクション。また20日も注意したい。この日は太陽が牡羊座にサインチェンジする日（春分）である。そして水星は24日に木星と

16.5年サイクルは66カ月（通常レンジは55～77ヶ月）のサイクル3つで構成されていると見ます。現行サイクルは2011年10月31日の75.57円が起点ですが、ここがボトムであった前の16.5年サイクルを見ると1995年4月の79.70円から55カ月、62カ月、と節目の安値を形成。そこから上記11年安値は81カ月目なのですが、これは最終位相特有の歪みと見ます。

現行16.5年サイクルに話を戻すと今月は11年安値から65カ月目。起点から56カ月目の2016年6月24日の99.04円で第一位相のボトムをつけたと見ます。もしそうであれば、今月は第二位相の9カ月目です。前の16.5年サイクルの第二位相では、起点から26カ月後に天井をつけました。サイクルの序盤は強いので、まだまだ上昇余地はあると分析します。

オポジション。つまり、ここは水星トランスレーションの時間帯。更に、その翌日は金星逆行中間点（太陽・金星コンジャンクション）だ。して中間点（逆行の場合は“外合”か“内合”とも呼ばれる）が相場の節目となりやすい。…3月2日の太陽・海王星コンジャンクション（0度）が魚座で起こる点にも注意しておきたい、この3つの星と先述の木星はどれも原油に関連している。この前後に原油相場に変転があれば、それが何かの引き金になる可能性もあるだろう”。ここで示した12日の天体位相は、短期的な反転ポイントになるかも知れない。即ち、今週頭に下落していた相場は反転上昇、下降していた相場は反転下落に向かうのではないかと。もしそうであれば、日柄的な要件も加味して、18～20日に向けて加速、24～25日で再度反転、最終的な相場の節目は4月15日の金星逆行付近でつけると予想する。

今月末、米国時間30日（日本時間31日）に木星は冥王星とスクエアの関係に。ここも有力な反転ポイントの可能性が高いが、上記の流れで進むなら加速ポイントになるかも知れない。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 3月13日（月） 重要変化日前後1営業日含む
- 3月14日（火） 衝動的な売買はアゲインストになりがち
- 3月15日（水） 月が騒ぎ、民衆が騒ぐ、市場は動揺し易い
- 3月16日（木） ダマシが頻発
- 3月17日（金） トレンド不発
- 3月18日（土） 相場の予測者は全てうそつきだ
- 3月19日（日） 相場予想はたまに当たるから厄介だ

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持続
けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例
で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望
銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー

代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円（税込み）

2017年は相場の節目か？

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日輝香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円（税込・送料別）

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問い合わせ：投資日報出版（株） <http://www.toushinippou.co.jp/>
〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444